



アゴラ — 鶴見大学図書館報 —  
第 134 号 2010 年 1 月 30 日発行  
編集・発行 鶴見大学図書館  
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3  
<http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>

## 目次

鶴見大学図書館 準貴重書を活用した西洋書誌学演習の授業	池田早苗	・ ・ p.1
成果発表 宇野暁央, 太田有香, 吉田直貴	・ ・ ・ ・ ・	・ ・ p.2-9

### 鶴見大学図書館 準貴重書を活用した 西洋書誌学演習の授業

池田 早苗  
(西洋書誌学演習担当 非常勤講師)

鶴見大学の西洋書誌学の授業では、和漢書に関する書誌学の授業を既にいくつも受けた学生達からの質問には、とても刺激を受けることがある。他大学にはあまり見られない光景ではないだろうか。「比較」というのは、書誌学研究に欠くことの出来ない重要な要素だが、学生達は既にその力を備え、西洋の書物ではどうなのかと比較する基を持っているからである。今期の演習の授業では、江戸末期から明治・大正期にかけて、社会全体の激動の変化期をくぐり抜けた書物たちが地下書庫にずらりと並ぶ準貴重書を活用させて頂いた。

なぜ日本の書物を西洋書誌学の授業で？とお思いだろうか。それは、次の質問の答えを探すためだった。私たちが日頃から手に取る書物の形態は、江戸期に盛んに広まった和綴じの本ではなく、今から約 500 年以上も前にヨーロッパのドイツで誕生した印刷術によって刊行されたグーテンベルク聖書と同じ形態をしている。それはなぜだろうか、という問いかけなのだ。

長く外国との交易を禁止されていた江戸時代が終わり、明治期の日本に続々と届いた洋書や翻訳書を、時代の流れ、或いは出版販売の変遷の順に沿って見ていくことで、それらの隠された解答が見えてくるのではないかと、準貴重書書庫を訪れ、当時の書物を直接見て調査をすることになった。

西洋書誌学の中心であるイギリスから日本に輸入された洋書、その翻訳や翻案<sup>1</sup>された本、また、準貴重書にある「夏目漱石」の著作などを、図書館のセミナー室で見せて頂き、直接手にして調査をした。

漱石は、政府の給費留学生として 2 年間ロンドンに留学した際に、本の内容だけでなく装丁にも大いに興味を持って洋書を買集めたことはよく知られている。帰国後に執筆された数々の小説を出版する際は、その装丁を特別に依頼した画家たちがいた。買い求めた洋書を彼らに見せデザインの参考にさせたという。詳しくは展示の解題に譲る。

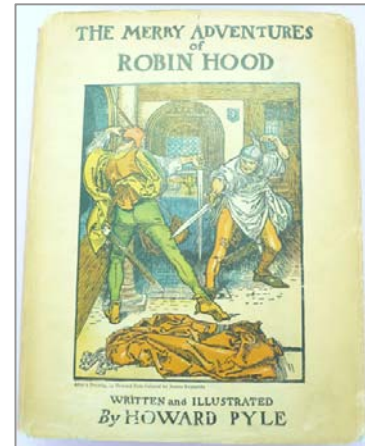
鶴見大学図書館準貴重書の利用や解説をはじめ、図書館員の皆様が快くご協力下さいました。厚くお礼を申し上げます。また、授業の成果を図書館で展示する機会を頂きました。展示で発表することになって学生達も意欲的に取り組んでいました。

<sup>1</sup> 原作の大筋は生かし、時代や背景などを（日本の）読者が馴染んだものに置き換えること

***The Merry Adventures of Robin Hood of Great Renown, in Nottinghamshire***  
written and illustrated by Howard Pyle (New York: C. Scribner, 1929)  
準貴重書 931.9/P 1054681

宇野 暁央  
(ドキュメンテーション学科 3年)

初版：1883年 収蔵本：1929年リプリント版  
大きさ：230 x 170mm  
ページ数：296ページ + xxページ  
装丁：ハードカバー (ダストジャケット付)  
口絵：有  
チェーンライン・ウォーターマーク：無  
ハーフタイトル：有  
書体：ニュースゴシックボールド  
挿絵：計45枚  
蔵書票：無  
書き込み：有 (見返し部分)



## 激動と変化の時代の中で Howard Pyle がアメリカの児童文学に与えた影響

### 1. アメリカの社会状況

19世紀後半、アメリカはイギリスで起こった産業革命の影響を受け、それまでの農業中心の生活から、商工業中心へと生活変化が起こり始めていた。しかし、農業を中心とする南部と、急速に工業化が進む北部との間で経済システムの違いから摩擦が生じ、南北戦争<sup>2</sup>が勃発することになる。南北戦争の直接的原因は経済的摩擦にあったが、別な側面として奴隷制という人道的な問題も大きく浮上していた。この戦争における南北両軍の死者は約62万人に達した。戦後、北部が支配権を持ち、アメリカは再建に向けて動き出すことになるが、この南北戦争は、単に経済問題や奴隷解放といったこととは別に、アメリカの近代化を加速化させ、女性が社会に参加できる機会を得、将来の担い手となる子供への期待を沸き立たせた一方で、自然主義的な人間観をアメリカにもたらしたと言える。

### 2. Howard Pyle の家庭環境

Howard Pyle は、1853年アメリカのデラウェア州ウィルミントンの熱心なクエーカー教徒<sup>3</sup>の家に生まれた。クエーカーとは、キリスト教の一派で平和主義を唱え非常に厳格な教義に則って生活を行う宗派のことである。このクエーカーの家系に生まれたことは、後のPyleの作風に大きな影響を与えることとなる。また、Pyleの母親は、1870年には白人の文盲率が11.5%、黒人では79.9%<sup>4</sup>を占める社会の中で、豊かな知識と教養を持ち、さらに芸術に対し強い関心を抱いていた。このことは、Pyleが幼少期から絵画や民話、伝説、中世の物語といった芸術的世界に接するきっかけを作り、Pyleは芸術分野において恵まれた環境で育つこととなる。こうした母親の影響で、Pyleは芸術の世界へ興味を示すように

<sup>2</sup> 桂宥子、牟田おりえ『はじめて学ぶ英米児童文学史』p 64

<sup>3</sup> 高杉一郎『英米児童文学』p 35

<sup>4</sup> 津神久三『黄金期のアメリカン・イラストレーター』p 23

なったと言われる。<sup>5</sup>

### 3. Howard Pyle の絵画と児童文学への関心

クエーカー派の学校を卒業後、Pyle はフィラデルフィアにある美術学校で3年間絵画の基礎的な技術を修得し、1876年ニューヨークにおいて挿絵画家として出発することになる。デビュー当初、彼の黒と白のやや太めの線を使った素朴で力強いペン画は無骨で荒々しいとの批評を受けた。しかし、時が経つにつれて繊細で優雅なイギリスやヨーロッパの傾向を受け入れていた当時のアメリカの挿絵界に新しい風を吹き込んだとして注目を浴びるようになった。<sup>6</sup>

Pyle は当初から『セント・ニコラス』などの多数の児童雑誌のために挿絵を書いている。このことは Pyle が活動の初期段階から児童文学に興味を持っていたことを窺わせる内容である。その理由として考えられることとしては、上記で述べたように母親の影響は欠かせないものであると思われる。幼少期に親しんだ、絵画や民話、伝説、中世の物語といったものは、彼の作品の基礎となり続けたのだと考えられる。

2つ目の理由として、彼の独創的なペン画は、ファンタジーやアドベンチャーといったその当時流行していた民話や伝説などを基として作られた空想の物語に合致する独特の雰囲気を用意していたことである。このことは、ロマンチックな味わいを感じさせ、人々を大いに魅了する形となった。人々が Pyle の作品に魅了されればされるほど、Pyle 自身も児童文学というものに魅了されていったのではないだろうか。

### 4. アメリカの児童文学

Pyle がデビューする以前のアメリカは、ヨーロッパからの移民の国として始まったため昔から伝わる民話や伝説、伝承などといったものはほとんど存在しなかった。あると言え、移民達が持ち込んだもので、アメリカ独自の文学と言えるものではなかった。厳密に考えれば、先住民と言われるインディアンや奴隷として連れてこられた黒人なども深く関与していると思われるが、これらが注目されるのはもっと後の時代のものであり、Pyle の時代のアメリカの児童文学の歴史はイギリスの影響の基に築かれたものであった。<sup>7</sup>

19世紀半ばまで、イギリスの児童書の影響を受けていたアメリカの児童書であったが、独立後は愛国心の高まりからアメリカ固有の素材と背景を利用した独自の児童文学が登場するようになった。冒頭で述べたように、南北戦争後は、社会による子供たちへの期待も膨らむようになり、子供向けの雑誌も創刊されるようになった。

### 5. 挿絵と児童文学

児童文学の発展には優れた挿絵画家が必要であった。しかし、19世紀後半までアメリカには、イギリスのような優れた挿絵画家がいなかった。ほとんどの本の挿絵はヨーロッパからの輸入品であった。また、リチャード・ダルビーはその著書の中で、「そもそもアメリカでは、本や雑誌に少しでも挿絵を描くということは画家の品格を損なうものであると考えられていた。<sup>8</sup>」と指摘している。こうした逆風の中 Howard Pyle は現れるのである。彼の登場は、アメリカにおける挿絵の地位を大きく向上させたと言っていいたいだろう。それまでほとんどないに等しかった挿絵画家という職業は、彼の登場によって、およそ数十年で

---

<sup>5</sup> 高杉 p 213

<sup>6</sup> 高杉 p 213

<sup>7</sup> 桂、牟田 p 14

<sup>8</sup> リチャード・ダルビー 『「子どもの本」黄金時代の挿絵画家たち』 p 37

全盛期時代を迎えるに至り、多くの芸術家たちが、挿絵画家としてやっていけるようになったのである。

優れた挿絵画家の登場はアメリカ児童文学界にも大きな変革をもたらした。同時期に輩出された名作や作家達と Pyle や後進の挿絵画家達が組み合わさることにより、19 世紀後半から 20 世紀前半はアメリカ児童文学の黄金期と呼ばれるに至るのである。

## 6. 児童文学を支えた社会背景

全盛期を迎えたアメリカの児童文学であるが、その要因は多くの優れた挿絵画家や作家の活躍だけではなく、児童文学の発展を後押しする社会の動きもあったということを見逃してはならない。19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて学校や地域での図書館活動が活発になり、出版社による積極的な児童書の出版活動も行われるようになった。また、1922 年には、アメリカで出版された児童書の中で、もっとも優れたものに対し年に一度贈られる「ニューベリー賞」、1938 年にはアメリカで出版された絵本の中でもっとも優れた画家に対して年に一度贈られる「コールドコット賞」が創設されている。これらの賞は、権威のある賞として現在でも続いている。さらに、1929 年には児童文学協会が設立されるなど、さまざまな努力がアメリカの児童文学を高いレベルへと押し上げていったのである。<sup>9</sup>

## 7. 画家兼作家として

Pyle は挿絵画家として挿絵を書いていくうちに、自らも作品を創作するようになった。今回取り上げた *The Merry Adventures of Robin Hood of Great Renown, in Nottinghamshire* (和訳書名『ロビンフッドの愉快的冒険』) は、その最初の作品である。これはロビン・フッド伝説を再話という児童文学のジャンルにおいて、その文学としての価値ばかりでなく、今までになかった文章にマッチした見事な挿絵の効果によって表現した完璧な再話として高く評価されている。<sup>10</sup> このことは、挿絵画家として成功をおさめていた Pyle にとり、作家としての新しい出発を意味していた。

## 8. 作家としての側面

Pyle は *The Merry Adventures of Robin Hood of Great Renown, in Nottinghamshire* を再話するにあたり、児童作家としての配慮をみせている。それは児童向けに脚本を分かりやすくしたことと、残虐的なシーンを抑えたことである。<sup>11</sup>

ロビン・フッドの物語は伝承をもとに作られているため、もともとその内容には諸説あるが、Pyle が登場する前の多くの作家は、ロビンを王国から追い出された貴族として捉えていて、彼の目的を謀反にあるように表現していた。しかし、Pyle はより子供向けに分かりやすく表現するため、ロビンを不正と戦う勇ましいヒーローとして描いている。この表現は子供向けに行ったものであったが、一部の大人にまで人気が広がり、Pyle の名をさらに高める形となった。

残虐的なシーンを抑えたという点については、この本が書かれたのが 1883 年と南北戦争から 20 年ほどしか経過していなかったため、時代的に流血や殺人をタブー視する風潮があったためだと考えられる。どんなに勇敢なヒーローであっても、流血や殺人といったことになってしまえば、弁解の余地がないということも配慮されていたものと思われる。

<sup>9</sup> 桂、牟田 p116

<sup>10</sup> 高杉 p 214

<sup>11</sup> *Robin Hood: Development of a Popular Hero*

<<http://www.lib.rochester.edu/camelot/rh/RH%20Exhibit/text.htm#19th>> 閲覧日 2009/12/07

また、Pyle 自身がクエーカー教の家系であることも関係しているだろう。クエーカー教は、平和主義であり、いくら物語の中であっても殺人ということを描くことに若干の抵抗があったのではないだろうか。

## 9. Howard Pyle 考察

Pyle の *The Merry Adventures of Robin Hood of Great Renown, in Nottinghamshire* における変更点は、幅広い年齢層から支持され現代でも刊行されるほどの大ロングセラーになった。このことは、Pyle の画家と作家の両面が時代を越えて評価されていることを示している。また同時にこのことは、Pyle のロビン・フッドがそれまで存在したさまざまな伝承とは一線を画していて、現代につながる源流になったとも言えるかもしれない。

Pyle には他にもさまざまな再話の作品があるが、どの作品も絵画のような美しさを持っている反面、児童文学における親しみを含んでいるように思える。Pyle という人は、描くという才能を児童文学の世界で発揮しただけでなく、その才能をさらに書くということに昇華させることができた。だからこそ、アメリカ児童文学の黄金時代を築きあげただけではなく、アメリカの文学にも大きな衝撃を与えるほどの功績を残すことができたのではないだろうか。

### 参考文献

- 荒俣宏『絵のある本の歴史: Books beautiful』(東京・平凡社、1987)
- カーター、ジョン『西洋書誌学入門』横山千晶訳 (東京・図書出版社、1994)
- クレイン、ウォルター『書物と装飾:挿絵の歴史』高橋誠訳 (東京・国文社、1990)
- ダルビー、リチャード『子どもの本ー黄金時代の挿絵画家たち』吉田新一、宮坂希美江訳 (東京・西村書店、2006)
- ハウルト、J. C.『ロビン・フッド: 中世のアウトロー』有光秀行訳 (東京・みすず書房、1994)
- 本多英明、桂宥子、小峰和子 編『たのしく読める英米児童文学: 作品ガイド 120』 (京都・ミネルヴァ書房、2000)
- 桂宥子、牟田おりえ 編『はじめて学ぶ英米児童文学史』(京都・ミネルヴァ書房、2004)
- Robin Hood: Development of a Popular Hero*  
<<http://www.lib.rochester.edu/camelot/rh/RH%20Exhibit/text.htm#19th>>  
(閲覧日 2009/12/07)
- 定松正、谷本誠剛『英米児童文学読本』(東京・桐原書店、1982)
- 瀬田貞二、猪熊葉子、神宮輝夫『英米児童文学史』(東京・研究社出版、1971)
- 高杉一郎 編『英米児童文学』(東京・中教出版、1977)
- 津神久三『黄金期のアメリカン・イラストレーター』(神戸・ブックローン出版、1996)
- 上野美子『ロビン・フッド伝説』(東京・研究社、1988)

## 夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』

(東京・大倉書店、1911年7月2日) 縮刷版

太田 有香

(ドキュメンテーション学科4年)

ページ数：756ページ (本文：752ページ)

大きさ：15.1×9.4cm

口絵：なし

挿絵：752ページに1枚

装丁・挿絵：橋口五葉 (1810?[1811?]-1921)



縮刷版の装丁：菊判。天金。函付。角背。こば折れ表紙。

ダストジャケット：角枠の中に猫。猫を囲む角枠線内に鼠と魚の対称連続模様。

表紙：ダストジャケットと同じ。

裏ジャケット：角枠の中にカマキリの対称模様。

挿絵：橋口五葉によるデザイン。コップからビールを飲もうとする猫。ダストジャケットを外すと、角枠中の猫が浮き彫りとなる。猫を囲む角枠線内に描かれた鼠と魚はシンメトリな連続模様で、凹凸した表紙が現れ、装丁全体に工夫がうかがえる。

### 縮刷版の出版経緯

『吾輩ハ猫デアル』は、1905年1月『ホトゝギス』第8巻第4号(明治38(1905)年1月1日)から第9巻第11号(明治39(1906)年8月1日)まで計11回、連載された。この長編は、その後、単行本として出版されたが、その際は上編・中編・下編の3編で、大倉書店・服部書店の連名で単行本として出版。

菊判<sup>12</sup> 3冊(橋口五葉装丁)であったのを、三五判<sup>13</sup>(橋口五葉装丁)の1冊にまとめて縮刷版として大倉書店より出版された<sup>14</sup>。

夏目漱石(1867 - 1916)は、明治33-36(1900-03)年の英国留学から帰国後の明治37(1904)年に『吾輩ハ猫デアル』の第一回を書き始め、正岡子規が病死後、雑誌『ホトゝギス』を継承した高浜虚子に散文の創作を勧められ、創作の筆をとったと考えられている。はじめ虚子の誘いは「写生文」であったとされる。漱石は、斬新な趣向、すなわち〈猫が書く写生文〉という趣向で見事にそれに応えた。漱石は1回限りの短編として書いたのだが、好評だったため『ホトゝギス』誌上に続きを書くこととなり、結果として全11章の長篇小説となった。

### 装丁の比較<sup>15</sup>

【上編】天金。

ダストジャケット：羅紗紙に木版刷りあり。エジプト文様風の猫頭人身・鼠と猫の対称連続模様。人の容姿のこけし木菟(みみずく)のデザイン。

口絵：エジプト文様風の猫頭人身と魚のデザイン。

挿絵：孔雀、鶏。中村不折によるデザイン。

<sup>12</sup> 日本の紙・書籍の寸法の一つ

<sup>13</sup> 日本の紙・書籍の寸法の一つ。横3寸(約91ミリ)、縦5寸(約152ミリ)の大きさのもの

<sup>14</sup> 岩切信一郎『橋口五葉の装釘本』(東京・沖積舎、1980)  
第1章 - 漱石と五葉 5 - 『吾輩は猫である』38ページ

<sup>15</sup> 同書、第2章 - 五葉の装幀 2 - 漱石本の装幀、68ページ

【中編】造本上の体裁は上編同様。

ダストジャケット：花と茎と波形模様、木菟、タツノオトシゴのデザイン。

表紙：猫と撫子。

口絵：本を小脇にかかえる猫頭人身とネズミデザイン。

挿絵：カミキリムシ。タツノオトシゴ。浅井忠によるデザイン。

【下編】造本上の体裁上編同様。

ダストジャケット：タンポポと猫、木菟、角枠の中に夜の坂道を薪を背負って登る人。

表紙：円内に猫。

口絵：コップの水(?)を飲もうとする猫。

挿絵：角枠の中の人はダストジャケット同様。浅井忠のデザインによる。

### 装丁の比較から見受けられる『吾輩ハ猫デアル』の特徴

『吾輩ハ猫デアル』のタイトルイメージから連想させる素材として猫・魚・鼠が多く使用されているのは当然としても、昆虫や小動物といった生物、草花を好んで使用している様子もみられる。木菟・孔雀・蓮は橋口が最も好んで使用していた素材といえるだろう。

「対称」(シンメトリー)「対称連続模様」といった特徴的なデザインは、橋口による装丁作品に後々までみられる。

また、『ホトゝギス』連載当初の「吾輩は猫である」での平仮名混じりの文字を用いた活字から、単行本の題名の楷書、篆書風の字体レタリングは、注目すべき橋口の特徴と考えられている。

橋口は、上編・中編・下編のデザインでは既に独自の装丁スタイルを開花させていたと見られ、『吾輩ハ猫デアル』の装丁は、装丁意匠家・橋口五葉の処女作であるとともに、出世作とも考えられる。

### 縮刷版がよく売れた理由の考察

本調査において、縮刷版は初版発行から大正13年5月5日の101版まで発行されていたことが明らかとなり、ロングセラーの本であったこともわかった。

縮刷版の定価が、2円20銭で、現在の貨幣価値に換算すると約3千5百円と、意外に高価な縮刷版であったにもかかわらず、売り上げが好調であったのは、上中下3編の方はさらに高額で売られており、比較すれば安価な縮刷本が売れたと見られる。

本書は、漱石の本の内、縮刷版で刊行された初めての本である。売り上げを伸ばせたのは、橋口の装丁であったこともあげられるであろう。縮刷版で橋口の装丁本は、本書のみである。

漱石の書簡によると「五葉の挿畫は特徴がある無暗に他の雑誌杯には載つて居ない。あれは慥か(たしか)に五葉の畫で他人の畫ではない。僕は非常に感服した。」(明治38年2月13日付寺田寅彦宛・繪葉書<sup>16</sup>)と絶賛した。橋口五葉の装丁はそれまで雑誌だけだったが、単行本の装丁は大いに好評であったと思われる。

### 参考文献

岩切信一郎『橋口五葉の装釘本』(東京・沖積舎、1980)

江戸東京博物館・東北大学編『文豪・夏目漱石 - そのころとまなざし』  
(東京・朝日新聞社、2007)

古川久 編『夏目漱石辞典』(東京・東京堂出版、1982)

<sup>16</sup> 『橋口五葉の装釘本』第1章5-「吾輩は猫であるの頃」34ページ

## 夏目漱石『心』

(東京・岩波書店、1917年) 縮刷5版

吉田 直貴

(ドキュメンテーション学科3年)

大きさ：151mm×91mm

ページ数：447 (本文 438) ページ

著者：夏目漱石

口絵：有り

チェーンライン、ウォーターマーク：無

ハーフタイトル：無

書体：明朝体

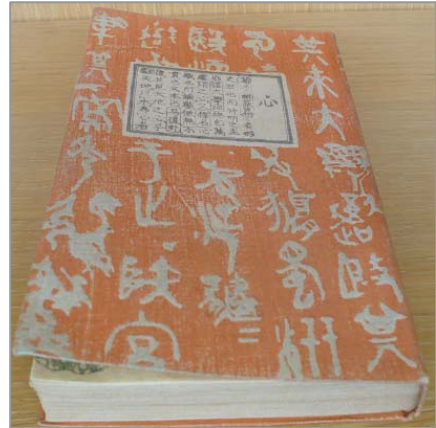
挿絵：本文中の146ページに黒く長方形の挿絵のみ

蔵書票：無

表紙：クロス装

書き込み：無

装丁：夏目金之助による。上部が天金



夏目漱石 (本名、金之助)、1867年 (慶応3)、江戸牛込馬場下横町 (現在、新宿区喜久井町) に生まれた。幼くして養子に出された。東京帝国大学卒業後、松山中学校、熊本第五高等学校などで英語を教える。1900年 (明治33) から1902年 (明治35) まで、英国へ留学する。帰国後、東京帝国大学などで教鞭を取るが、1905年 (明治38)、『ホトトギス』に『吾輩ハ猫デアル』を連載。1907年 (明治40) には教職を辞し朝日新聞社に入社する。以後、朝日新聞に『虞美人草』、『三四郎』、『それから』、『門』、『彼岸過迄』、『行人』、『こゝろ』、『道草』、『明暗』などを連載する。

(東北大学附属図書館 夏目漱石ライブラリ「夏目漱石について」)

『心』は朝日新聞の新聞小説に、「心 先生の遺書」として連載されていた。東京版は1914 (大正3) 年4月20日から8月11日まで、大阪版は東京版と同日に掲載を始めたが、新聞社の事情により東京版で6月10日に掲載された第49章は、大阪版は翌11日に掲載された。結果、大阪版での掲載最終日は東京版に6日遅れての1914年8月17日となった。尚、『心』は短編小説として書くつもりでいたのである。

(『漱石とその時代』 7『心』と『先生の遺書』115ページ)

この小説の主人公である「先生」は、かつて親友を裏切って死に追いやった過去を背負い、罪の意識にさいなまれつつ、まるで生命をひきずるようにして生きている。と、そこへ明治天皇が亡くなり、後をおって乃木大將が殉死するという事件がおこった。「先生」もまた死を決意する。(東北大学附属図書館 夏目漱石ライブラリ『こゝろ』)



## 『心』－ 漱石自身による初の装丁

装丁は、漱石が初めて自身で試みた作品。表紙の木版の漢字は井上凡骨が施した。木版の漢字は『康熙字典』の「心」の項目より引用したもので、『心』にふさわしい木版字を書いたのである。また、木版字は漱石全集の装丁にも使用されている。

見返しに「ars longa vita brevis」と朱印が押されているが、これはラテン語で「芸術は長く、人の命は短い」（『新収貴重書展』解説・目録より引用）という意味であり、人の命は短くとも、芸術は長きにわたって引き継がれるものであると唱えたのであろう。

『心』を執筆する以前の著書の装丁は橋口五葉に依頼し、この『心』の装丁では、箱、表表紙、裏表紙、見返し、扉および奥付の模様と題字、朱印、検印にいたるまですべて漱石自身で描いた。

## 参考文献

- 江藤 淳『漱石とその時代』新潮選書 第五部（東京・新潮社、1996年）  
玉井敬之、鳥井正晴、木村功『夏目漱石集「心」』（大阪・和泉書院、1991年）  
夏目金之助『心』縮刷5版（東京・岩波書店、1917年）  
夏目金之助『漱石全集 第16巻』『心 自序』（東京・岩波書店、1993年）  
夏目金之助『漱石新聞小説復刻全集「こころ」』第八巻（東京・ゆまに書房、1999年）  
夏目漱石『漱石全集 第11巻』『こころ』『心 自序』（東京・角川書店、1961年）  
東北大学附属図書館 夏目漱石ライブラリ 2009年12月12日アクセス  
<http://www.library.tohoku.ac.jp/collect/soseki/soseki.html>  
明治大学図書館『新収貴重書展』解説・目録 2009年12月15日アクセス  
<http://www.lib.meiji.ac.jp/about/exhibition/gallery/13/13pamphlet.html#b19>

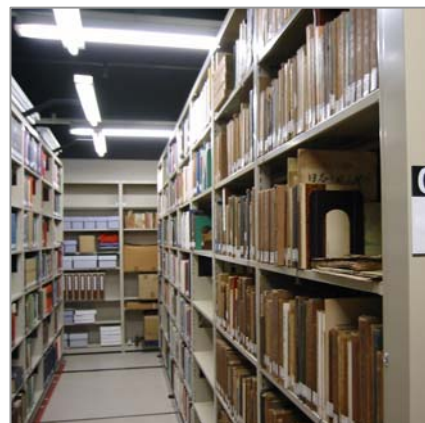


## 鶴見大学図書館における準貴重書の運用

### 資料区分

図書館が収蔵している資料には何種類かの「資料区分」があります。図書館で受け入れた資料は、資料の性格によって、1)貴重書、2)個人文庫、3)準貴重書、4)原装複製本、5)絵本・紙芝居、6)文庫・新書、7)参考図書、8)大型本、9)一般図書、などに区分されます。よく利用する一般図書の前には、いくつかの資料区分が存在していることがわかります。

資料区分によって、図書館に配架される場所が異なり、貸出できるかどうかも異なります。今回とりあげる準貴重書は、地下2階の集密書庫に収蔵されている資料です。



### 収集範囲

準貴重書としての収集対象には、明治文献<sup>1</sup>、明治以降の文学作品の初版本や内容の改訂されている再版本、女流作家、および、活躍していた当時は有名であっても個人全集が発行されていない作家の著作などがあります。これらの作家の文学作品が収録されている叢書・シリーズと、作品が最初に掲載された雑誌も収集対象です。

当館の所蔵する準貴重書は、装丁や挿絵、本文における変遷を研究するうえで貴重な資料群といえます。

女流作家や個人全集が発行されていない作家の著作を収集対象としたのは、本学が女子短期大学であったことと、価格的にも収集しやすかったことに起因しています。網羅的に収集している作家は100名ほどです。例えば、小栗風葉の著作をOPACで検索すると74件がヒットしますが、ヒットした図書が出版されたのは明治・大正時代で、当館ではすべて準貴重書に区分しています。当時は流行作家でも、現在は著作を書店で購入できない作家といえます。こうした作家の著作は、当時の叢書・シリーズや文学全集には収載されており、『日本近代文学大事典 第6巻』の「叢書・文学全集・合著集総覧」(430項目)を参照して、叢書・シリーズなども収集しています。

収集の観点で重要なのは、書誌学<sup>2</sup>的な研究や資料展示が可能な資料であるという点です。これまでに『第122回貴重書展 明治の話芸：三遊亭円朝と速記本』などの準貴重書と貴重書を組み合わせた展示も開催しています。

### 利用

準貴重書の館外への貸出はできません。また、古い資料なので複写もできません。利用は、館内での閲覧に限定されます。閲覧する場合は、事前に閲覧申込をおこない、壊れやすいので丁寧に取り扱いなければなりません。

### OPACでの検索

「配架場所」を「書庫 準貴重」に設定して検索すると15,620件ヒットします。OPACで表示可能な件数は1,000件までなので、キーワード、分類、出版年を入力して件数を絞り込んで表示します。

- 1 明治文献とは古書業界の用語で、明治期に発行された官民の出版印刷物、資料類など、当時の諸相を示すものです。【樽見博. 三度のメシより古本! 平凡社, 2007, p.33】
- 2 書誌学とは、書籍を研究の対象とする学問のことで、書籍の成立・発展、印刷・製本・装丁・挿絵、材質・形態などの一般的な研究と、ある書籍について個別に行う研究があります。